
扉の向こう

三村佐鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

扉の向こう

【Nコード】

N4397V

【作者名】

三村佐鳥

【あらすじ】

学園の旧校舎を自分たちの根城にしていた歩と桂。ある日、地下に隠し部屋を見つけた二人。その扉の向こうには、見たこともない世界が広がっていた。

1-1 (前書き)

学校の授業中に考えていたお話です。最後までお付き合いいただければ幸いです。

目を覚ますと、妙に風通しが良いことに気付いた。

歩あゆむの席は一番前の、廊下側から二列目。よっていつもならあまり風は感じられない。しかし今は、窓からダイレクトに流れてきたと分かる風が、かすかに髪を揺らしている。

歩は、なままだにあゆむ風谷歩はノートに張り付いていた顔を引き剥がすと、大きく伸びをして、

そして周りの机が無いことに気が付いた。

(げ……これは、もしや)

固まった歩に、

「せい」

「おふっ……何をする卑怯者」

後ろからつつく人物がいた。

振り向くと、案の定顔中ニヤニヤ笑いの幼馴染が立っている。
いながわけい

稲川桂。中性的で涼しげな顔立ちに、高1にして175の高身長、黒髪ショート、歩の腐れ縁的な存在である。

「おそよう歩。とりあえず邪魔だから机下げていいか」

「あーやっぱり……。一応聞くけど今何時？」

「3時20分」

「……なんで誰も起こしてくれないの」

何ということだ。机が無いのも当たり前、いつのまにか六時間目を通り越して、ついでに終礼まで飛び越えて掃除の時間ではないか。教室を見渡すと、勿論と言うか何と言うか、残っている机は歩のみのだけで、すべて後方に下げられていた。

「あ、風谷さん起きたー」

「ほんとだー」

「おはよー風谷さーん、よく眠れたー？」

歩が起きたことに気付いたクラスメートたちが、声をかけてくる。

どうやら心優しい彼女たちは、爆睡している歩を起こさないようにと、気を使ってくれていたらしい。

「あ、ありがとう……というか何かごめんなさい……」

「えーいいよ別にー」

「すみません……」

謝りつつ、心優しくない隣の人間を睨みつけておくことも忘れない。

「恨みのこもった良い目ですな」

「桂でしょ」

「何がー？」

ほう、すつとぼけるとはいい度胸だ。

「寝ている私をそのままにしたのは桂でしょうっ」

「あは、ばれちった」

「桂が片目瞑って舌出しても可愛くないから諦めなさい」
はぁーと溜息をついて、机の中の物を片付け始める。

もう教室掃除も終わりそうだ。

「まったく……とんださらし者じゃない」

「いやー気持ちよさそうに寝てたからさ」

「それで面白そうだから放って置こうと」

「イエスッ」

「地獄行ってよ」

「そりゃあムリな相談ですぜ旦那」

「……むかつ」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

教室掃除終わりー、という声がして、今まで箒を使っていたクラスメイト達が用具入れに向かう。

「終わった終わったー」

自分の鞆のところに向かおうとする桂の背に、声をかけた。

「……桂って教室掃除のはずよね」

「さあー歩、行こうかー！」

「箒は持ってるけどちゃんと掃除したの？」

「どうかな。それはどうかな。開けてみなければ分からないシユレ
ディングアの猫。ふふふふ」

「また掃除サボった、と」

桂はくると歩の方を向いた。

「大事なのは過程じゃない、結果なんだ！」

「それでもサボったことには変わらないけどね、桂」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

歩の通う私立竹延学園たけのべは、伝統も知名度も人気もそれなりにある、
中高一貫の女子校である。広々とした敷地を持ち、そのせいかはわ
からないが（多分そのせいではないだろうが）、運動部文化部共に
活動が盛んで、特に弓道部と弁論部は全国トップクラスの実力を誇
っていたりする。

そんな竹延学園だが、数年前に高校校舎の建て替えをした。70年
以上使われ続けた校舎に限界が来たのだろう、壁や床が随分脆もろくな
っていたようだ。

さて。普通は校舎の建て替えをする、と言うと、まずプレハブを建
て、生徒たちは一年間程度そこに通い、その間に旧校舎を取り壊し
て新しい校舎を建てる、のだろう。しかし創立者一族がものすごい
オカネモチだったせいでバカみたいに広い敷地を持つこの学園は、
そんなまどろっこしいことはしなかった。

なんと旧校舎は取り壊さず、敷地内の別の場所に新校舎を建てたの
だ。そして、その旧校舎は今でも残っている。取り壊す必要がない
から、らしい。いいのかそんな理由で。

旧校舎が残ったことで、喜ぶ人は多かった。当然旧校舎に愛着のあ
るOGは多いし、歴史の感じられる校舎に憧れて入学した、という
生徒だって少なからずいる。しかしそのような理由ではなく、もっ

とマイナーな、はっきり言ってしまうえば少しワルな理由で喜ぶ生徒もいた。

ワルい生徒その一が言うには、

「旧校舎っていいよな、人來ないし」

生徒その二。

「居心地良いのよね、清潔すぎる新校舎と違って」
つまり。

歩と桂は毎日放課後、勝手に旧校舎に忍び込んで、のんびんだらりと過ごしている訳なのだ。

一年生とは言え、もう勝手知ったるこの学園である。どの時間帯な
ら人に見られず旧校舎まで行けるか、二人は完全に把握しているの
だった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「よっ……と」

鍵の外れた窓を乗り越え、桂が床に降りた。

1-1 (後書き)

変なところで切れていますが仕様です。気にしないでください。感想、意見、文句等ありましたらジャンジャン言って下さい。お願いします。待ってます。

1-2 (前書き)

前回と比べてかなり長くなりました。

「ほら」

と差し出された桂の手を借りて、できるだけ音のしないように乗り越える。

ギギッ、と錆び付いた音がして、観音開きの洋風窓が閉まった。

「本日も華麗に侵入成功ー」

「グッジョブ桂」

二人は荷物を持つと、こそこそと廊下の奥の部屋、応接室と書かれた扉へと向かった。

ドアノブを下ろすとカシャン、と軽い音がして、大きな木の扉は簡単に開いた。

部屋の中は使われていた当時のまま、ソファやテーブルが置かれている。学園は旧校舎を取り壊さなかったばかりでなく、校内の大部分の備品（例えば黒板）をそのままにしておいたのだ。

この緩い管理体制は正直言ってしまうとどうかと思うが、今実際に歩たちがこうしていられるのは、間違いなく学校側の管理及びセキュリティが甘いお陰なのだ。あまり文句は言えない。

「はっあー、疲れたダルい」

ぐだっ、と手足を投げ出してソファに寝っ転がる桂。スカートの裾が折れているが流石と言うべきか、まったく気にする様子はない。

「あのさー歩ー。いつも言ってるけど、なんで明日の予習なんてするんだ？ そんなのしなくたって変わらないと思うんだが」

「あのねえ」

数学の問題集を開いて、歩は溜息をついた。

「みんながみんな、桂みたいに頭が良い訳じゃないの。分かる？」

「まあ確かにそうだけどさ、でも面倒臭いだろ」

「自分が頭良いことは否定しないのね……」

窓の外には並木道。黄色く色づいた葉が、季節が秋であることを知らせてくる。

10月の半ば、本日も快晴なり。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

細かい字で設問の詰まったページを3枚片付けふと顔を上げると、向かい側に寝転がっていた桂が静かな寝息をたてていた。さっきは歩が前後不覚に眠り込んでしまっていたが、あれはなかなか珍しいことで、実際のところ授業中の睡眠が多いのは桂の方だ。

歩はくすりと笑って、寝顔でも撮っておこうかと携帯電話を取り出しかける。が、桂は寝返りを打ち、ソファアの背に顔を向けてしまった。

「……面白くない」

小さくおどけて呟くと、また数式の世界へ没頭する。

そして十数分たった頃。

「ん……」

再び顔を上げると、いつの間にか目を覚ました桂が、口元にうっすらとニヤニヤ笑いを浮かべてこっちを見ていた。

「どしたの」

「ヒマ」

「は？」

「だから、ヒマなんだって」

……どうしろと言うのだろうか。一応部屋の中を見回してみるが、当然何も無い。ある物と言えば、今日使った教科書たちと、歩の広げている問題集くらいである。

「……問題集解く？」

「っがああー！ 違う違うそう言うんじゃないくてだな」
がばあ、と身を起こすと、桂は楽しそうにこう言った。

「久し振りに探検しよう」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

暖かく、仄かに埃臭い空気が流れている。体重を移動させる度、小さく軋む床。ちらちらと揺れる光が、足元を照らす。

「……やっぱり床腐ってるんじゃない？」

「えー、まっさか」

「踊り場の隅、穴開いてるんだけど」

「……」

二人は応接室を離れ、普段行くことのない地下へ向かっていた。二人が今いるのは、その地下へ続く階段。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

数分前。

「探検？ 唐突と言うか何と言うか」

「いいじゃんヒマだし」

「それは桂が、でしょうに」

「大丈夫だジャイアンの思考が全てを解決してくれる！」

「……桂？ やっぱりまだ寝が足りないんじゃない？」

「何を言う。こんなに私の頭は光り輝いているというのに！」

「それ世界史の柳瀬やなせに言ったら殺されるわよアンタ」

柳瀬やなせ克喜、職業…教師（世界史）。後頭部に本人は十円と言い張る輝き有り。生徒たちの見立てでは千円サイズらしい。

「ならば明晰と言い換えるのみ。ほらほら問題集なんて仕舞った仕舞った！」

何がそんなに楽しいのか、この友人の目が踊っている。

こうなったらもう止められない。歩は本日何度目になるか分からない

い溜息をついた。

「で？ どこ行きたいの」

「上の階はあらかた制覇したからな……地下とか」

「地下」

「うん。まだ行ってないし」

「まあ確かに行ってないけど……。ここ電気通ってないのよ？ 暗いじゃない」

「うむ。それはとっくに対処済みだ。見ろ！」

「ばーん、と桂がテーブルの上に置いたのは。

「……」

「どう、どう？ ナイスだろ？」

「……ツんなモンどっから持ってきたああっ！！」

ガシャリ、と無造作に置かれたそれは、煤の汚れがひどく、一目で年代物と分かる、

ランプだった。化学の実験で使うようなやつじゃなくて、正真正銘の、ランプ。

「いやー、流石旧校舎。探せばあるもんだね」

「な……なんでそんなものが」

「なんか五階の元美術室に転がってた」

「嘘！？」

「いやホント、マジで。先週旧校舎^{こくしや}うろついてたら見つけた」

恐るべし旧校舎、七八年の歴史。というか本当に大丈夫かこの学園。探せば似たような物がざくざく出てきそうだ。

「マッチもあるし、これで地下の暗さはノープロブレム」

「マッチ……桂って本当に用意が良いのね、ちょっと感心」

「ん？ マッチはそこに転がってたんだが」

「……頭痛い何なの旧校舎^{こくしや}」

とこんなやりとりがあったかどうかはさて置いて、結局二人は旧校舎の地下へ向かうことになったのだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「地下ってこんなだったんだな」

「ランプ、必要なかったね」

「かも」

強度の怪しい階段をおっかなびっくり下りて着いたは地下一階。しかし地下にしては随分明るい。見回してみると、天井に小さな窓が並んでいる。そこから日の光が差し込んで、廊下を柔らかく照らしていた。

「そういえば、裏庭に小さなガラス板が嵌め込んであったはず」

「あ、そうなの？　じゃあそれが明り取りだった、ってことね」
世の中知らないことが多いものだ。殊、この旧校舎に関しては。

地下に来て何もしないのもアレなので、とりあえずこのフロアを歩き回ってみることにした。

歩は右、桂は左。階段から二手に分かれ、面白そうなものを見つけたら声をかける。……と言っても面白そうなものなんて見つからないのが常な^{つね}のだが。

壁伝いに、歩く。天井の明り取りがあるとは言え、照らされているのは廊下の中央部分のみ。端には光が届ききらず、闇が^{よじ}濺んでいる。後ろを振り返ると、桂の持つランプが小さく揺れているのが見えた。ゆらゆらと幻想的に^{ほのひか}仄光る、オレンジ色の炎。

「……」

ただ単純に、きれいだな、と思った。見つめていると、小さく、小さく、どんどん遠くなっていく。そういえば桂は歩くのが速いんだったつけ。

「ふう」

首の向きを戻し、歩き出そうとして

「あれ」

手に当たる感触に、違和感を覚えた。それまで若干頼りない板張りだったはずの壁が、つるりとしている。まるで石のようだ。

ぺたぺたと周囲の壁を触ってみるが、返ってくる感触は全て木材。どうやら歩の前にある10cm×20cmの、この部分だけが石でできているらしい。これは『面白いもの』に、

「……ま、入るでしょう、当然」

おい、と遠くにいる桂を呼ぶ。

遠ざかっていく揺らめきが止まり、すぐに桂が走ってきた。

「何、何、面白いものあった？」

「これなんだけど……桂、ちょっとここ照らして」

ランプに照らし出されたのは、予想通り、板張りの中に一つだけ埋め込まれたタイルだった。

色は茶色。触らず、見るだけだったら気付かなかったろうと思われるた。

「見るからに怪しいー」

「賛成」

「うーん……」

なにやら桂が小難しい顔をして唸っている。

「何？」

「いや、よくあるお話とかだとさー」

「うん？」

「こういうのって大体は」

そう言くと、桂はタイルをコン、と叩いた。

「隠し部屋の扉だったりするんだよねー……って、え？」

「……え？」

二人同時に間拔けな声を上げたその様子は、傍で見ている人がいたらさぞ見物だったことだろう。

桂がタイルを叩いた次の瞬間、軽い音をたてて、タイルがすっぽ抜けたのだ。奥に、ではない。手前に、歩たちのいる方向へ。

「えーっと……？」

「ちょっと貸して」

桂の手からランプを借りると、歩は今タイルが抜けてできた空洞に、顔を近づけた。

「ああ、やっぱり」

「何がさ」

「ほらここ」

歩が指差した空洞には、小さなバネが並んでいた。外から衝撃を与えて、タイルが内側でなく外側へ抜けたのはこのためだったのだ。

「でも何でこんな仕掛けが……？」

「あ、桂」

歩はもう一度空洞を指差す。

「や、だから……あ」

桂は気付いた。バネの並んだ、その奥に見える、金色をした細長い金属は、

「ドア……の取っ手？」

「多分ね」

こんな所に何故、ドアが隠されているのか？ 全くもって不思議だ。知りたい。

しかし歩の直感はどう告げていた。

関わらないほうが良い。面倒なことになる、と。

ところが直感に耳を傾けない、もしくは直感で生きているような人間はどこにでもいるもので。

「……ちよつと？ 何やってるの？」

「え？ いやいや開けてみようかと」

「馬鹿でしょ」

「っそんなザックリ言わなくても」

「見るからに『面倒なこと』なのに全く気にしないのは馬鹿じゃないの？」

「馬鹿です」

「いやまあ分かってるけど……開く？」

「多分……お」

キシッ、と小さな軋みの音と共に、ゆっくりとドアが開く。ちなみに周囲の板張りもドア型に切られていたらしく、普通のドアと大きさは変わらなかった。

「開いたけど……」

「開いちちゃったね……」

「うん……」

顔を見合わせ、ドアを見つめる。扉の向こうは暗闇に包まれ、何があるのかさっぱり見えない。

その内、

どちらからともなく、

「あれ？」

「……うるさい」

「さっきは文句言ってたのに入るんですか歩サン？」

「うっさい黙んなさい」

扉を開ききる。

むわっ、とよく分からない匂いが溢れた。しかし悪い匂いではない。

「桂、先」

「ん」

ランプを持った桂を先頭に立たせ、歩は後に続く。

足を踏み入れた瞬間、柔らかい感触が返ってきて、

（まづいっ！？ 床が腐ってる！）

と慌てたが、すぐにその正体に気付いた。

土だ。

土が敷き詰められている部屋なのだ。しかも余程広いらしく、音の反響が無い。

先程からの匂いはまだ続いている。何の匂いだっけ？ と首を捻るが、思い出せない。

「桂ー、これ何の匂いだっけ」

「……」

「桂？」

顔を覗き込もうとして、

「むぐっ!？」

口を塞がれた。同時にランプが消える。

どうしたの? と聞こうとして、思わず動きを止めた。

「誰かいる」

低く、桂が囁いたからだ。

(え、嘘!？ まずい、見つかったら)

立ち入り禁止の旧校舎にいて、しかも念入りに隠されていた部屋の中に入ってきているのだ。おそらく見つかったら、ただでは済まないだろう。

慌てる歩を余所^{よそ}に、足音が近づいてくる。

桂の息遣いが荒い。手が汗ばんでいる。

身を硬くする二人の、数メートル手前で、足音が止まった。

(何……見逃してくれる?)

思いつつ、そんなことはないだろう、と頭^{かぶり}を振ったその瞬間。

「誰だ」

厳しい声が浴びせられた。

1-2 (後書き)

下書きの五割り増しになりました。全てパソコンの魔力です。

感想、意見、文句等ありましたら、ジャンジャン言ってください！
待ってます！

1-3 (前書き)

なんとか……ふう。

「誰だ」

もう一度ゆつくりと、声が繰り返す。若い男の声だった。しゃがみ込んだ二人を威圧するように、声は上から降ってくる。

じりっ、と歩の足元が音をたてた。

（……っおおおっ!?!）

隣にいる桂から、この阿呆ッとも言いたそうな空気がビシバシ伝わってくる。申し訳ない。

「……どうしよう?」

小声で桂に尋ねる。このまま時間が過ぎていくのだけは避けたい。プレッシャー的に絶対耐えられない。そしてしゃがんだままなので足がツライ。無理。

「そうだな……」

「何か良い案、ある?」

桂は暫く考え込むと、首を上げた（気配でそうと知れる）。

「逃げる」

「うんまあそうだろうね」

今更何を言っているのだコイツは。聞いているのは逃げる手段のはずだったのに。

「私が聞いているのは行動じゃなくてその手段なんだけど」

「三步進んで二歩下がる」

「逃げてないじゃん!」

こういう時まで無駄なボケをかますのはやめてほしい。

「まあ冗談は置いといて」

当たり前。

「時間稼ぐから、扉開けて」

「……りょー」

そもそもここに入ってきてからそれ程の距離を進んでいない。精々

四、五メートルといったところだろう。あの重い扉を開けさえすれば後は簡単逃げるだけ。そして相手には誰だったのかさえ分からない。

トンッ、と足踏みの音がした。

「俺は待つのが嫌いなんだが」

焦れたように数メートル先からの声がする。こうは言っても歩たちが話している間待っていてくれたのだから、この声の主もなかなか辛抱強い性格なのかも知れなかった。まったく、これが噂に聞くツンデレというヤツかしら、キャッ。……コホン。

「お待たせして申し訳ありません。少々逃げる手筈を整えていたものですから、ね」

桂が立ち上がった。歩は低い姿勢のまま、音を立てないように後ずさる。そしてくるりと後ろを向いて、ゆっくりと進みながら、扉を探す。

自分の前方に壁があるかどうか、というのは大体分かるものだ。今は後方で男が何か怒鳴っていてくれるから、非常に探しやすい。

(……ナイス、桂)

多分わざと挑発して怒らせたのだろう。殴られたりしなければいいけれど。

「どこ……かな」

思ったよりも距離があるのか、中々壁の気配がしない。正直そろそろ見つかってくれないと困る。予想より早く男が怒り出してしまったし、一般に怒った人間は何をするか分からないものだ。特にそれが、若いとは言え歩たちよりずっと年上の男ともなれば、

(まあ、……用心するに越したことは無い、って感じ?)

動くスピードを少し上げ、体も軽く起こして、素早く辺りを見回す。とりあえず右側へ、足を踏み出して重心を移動させた瞬間、

ゴツッ。と鈍い音が響いた。頭を、打った。わりと勢いよく。

歩はくらくらと眩暈のするのをなんとか抑え、今自分がぶつかった物が何なのか、手を伸ばす。

ザラリとした感触。乾いた硬質な皮。

「これは……」

木だ。直径四十センチ程の木が生えているのだ。

「なんで……？」

ここは、部屋ではなかったか？

妙なところに隠されていたとは言え、ここは只の部屋ではなかったか？

光の無い、真っ暗闇のこの中で第一木など育つはずも無い。しかし、歩の前にしっかりと立つ一本の木は、疑いようも無く生きた木だ。叩いても揺らしてもビクともしない。

思えば。

この“部屋”に入った時に歩が感じたのは、“森の匂い”だった。

足を踏み入れたとき、柔らかな腐葉土の感触が返ってきた。

息を潜めてしゃがみ込んだとき、鳥の鳴く声を聞いた。

そして今。

立ち尽くして上を見上げる歩の耳には、確かに木の葉のざわめく音が聞こえる。

意識した瞬間。自分が気付いていなかった、いや、見過ごしていた様々な物事が湧き上がり、渦を巻き、凄まじい奔流となって歩を押し流そうとする。

今なら分かる。ここは違う。ここはもう、学園の旧校舎の中なんかじゃない。

もつと違う……別の、異質など何か。

「ど、こ」なの。

声は掠れる。届かない。

急に心細くなって、歩は走り出した。

途中何度か木の根だろうものに引っかかり、多分大きな迂回を繰り返して、

「あ」

見つけた。

桂を、見つけた。

何故だかとても呼吸が乱れていて、疲れ切っているようだったけれど、それは確かに桂だった。

「け……い、」

小さく呼びかけると、桂はこちらを向いて、少し驚いたように目を瞠った。

「ああ……開けて来て、くれた？」

そうだ。桂は多分、気付いていない。ここが一体、“何”^{どこ}なのか。

「桂、聞いて。この部屋、ええと、“ここ”は、」

整理しながら話そうと、歩が口を開いた。その瞬間、

「お前えっ！」

怒鳴り声が飛んできて、ひっ、と歩は身を竦めた。

桂は露骨に嫌そうな顔を見ると、舌打ちしながら声の方へ顔を向けた。

「撒^まいたと思ったのにな」

その言葉から察するに、どうやら桂は先程の男と大規模な追走劇^{チェイス}を繰り返していたらしかった。

そうこうする内に、ゼイゼイと息を切らしながら、男が現れる。

「お前！ 逃げ切れるとも思ったか、残念だったな、ここは俺の」
しかしその言葉は、桂の隣に立つ歩を視認した瞬間に途切れた。

「お、お前……お前たち………」

ふつふつと血が上っていく。

それは際限なく男の顔を怒りに染めていき。
そして。

「ふ、たり組だったのか!!」

ついに男が叫び声をあげた。

「俺を騙したな!」

獣のような咆哮を上げ、二人に跳びかかる。

「歩っ!」

桂は立ち尽くしている歩の手を引っ張り、走り出した。先程まで男に追いかけていたため、もう体力は限界だ。それでも、捕まるわけにはいかない。

「おい歩っ! 走れ!」

今、歩はほとんど桂に引きずられるようにして走っている。恐怖で足が竦んでいるのか、それともどこか足を怪我もしているのか。背後からは男の荒々しい足音が聞こえてくる。もう、男との距離は数メートルしかない。

もう、駄目だ。

桂が諦めかけた、その時。

ざあっ

と風が吹いた。

「……は?」

思わず走ることも忘れ、桂の口から、そんな言葉がこぼれ出た。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

歩は必死に考えていた。

さっき、歩は桂を見つけた。

さつき、男が来るのが見えた。
さつき、男の顔の色の変化が見えた。

何故？

真っ暗闇ではなかったの？

足元も、目の前も、隣を歩く桂の顔さえ見えないような、正真正銘の、真っ暗闇のはずではなかったの？

ぐるぐると考えながら、歩は答えが分かっていた。

ここは“森”なのだから。

それでも、そんなことは有り得ない、と理性と言う名の石頭が抵抗する。

有り得ない。有ってたまるか、と。

しかし。

「……は？」

桂の声が耳に届く。確かな風を感じる。

歩は上を、いや、空を見上げた。

「ああ」

やっぱり。

風が吹き、木々が揺れ、その隙間から見える空の雲が払われ、銀色に輝く月が顔を出した。

「なん、で」

桂が呆然としたように呟く。

「さつき、言えなかったよね」

木の根に引つかかって倒れていた男が、喚きながら走ってくる。

「ここはもう、“違う”場所なの、桂」

「“違う”……」

「そう」

もうすぐそこに男が迫ってきている。

歩は振り返って、男を見た。

（どうせなら殴らないで欲しいなあ……）

もう走る気力も失せて、ぼんやりとそんなことを考える。

と、

歩は男が、ブン、と大きく腕を振り、何かを握り込んだのを見た。

直感的に理解する。

今、風を掴んだのだ、と。

男は、その握り込んだ手を、ぱっと広げて歩たちの方へ向けた。掴

んだものを投げるような仕草。

次の瞬間だった。

轟ッ！

と凄まじい勢いの風が広がって呆気なく歩たちを吹き飛ばし、地面に叩き付けたのだった。

1-3 (後書き)

前回からきっかり一ヶ月空いてしまいました。……反省しています。

感想、意見、文句等ありましたら、ジャンジャン書いて下さい、お願いします。

1-4 (前書き)

一ヶ月以上間が空いてしまいました・・・

幽かな声が聞こえた気がして、歩は薄く目を開いた。

夜だ。また、と言うべきか、まだ、と言うべきか。

朧に輝く月光は、部屋の中で暗く沈む家具の輪郭を浮かび上がらせている。

（ここ……どこだろう）

そう広くはない部屋。明らかに歩のいつも暮らしている部屋ではない。

歩は窓際に置かれたベッドに寝かせられているようだ。暖かな毛布を体の上から除け、そっと床に降り立つ。

月が。銀に光る月が、濃紺の暗闇にぽっかりと浮かんでいる。

大きく開け放たれた窓から、柔らかな夜の匂いが入って来る。

視線を下げると、黒い、森のシルエットが見えた。

「あ」

少し、思い出した。

夜の森で、何か知らんが少しばかりブチ切れなさった男に追い掛け回された拳句桂もろとも土の上に叩きつけられ……少しじゃなかった全部思い出した。

「だとするとここは……」

あのブチ切れ男の棲み家だろうか？ それにしては随分と扱いが親切な気がするが。

それに、窓からの景色から推測するにこの部屋は三階ほどの高さにある。一人だけで三階建ての家に住むのは、まあ絶対に無いと言

い切れないがまず無いだろう。
だとすれば、ブチ切れ男とは無関係の誰かが運んでくれたか、それとも……

「……ふあつくしゅ！！」

くしゃみが出た。

止まらなくなってしまった。

「ティツシュティツシュ……は無いか」

「ほあ……。月キレイ」

「あれ、そう言えば」

ブチ切れ男から、うまく逃げられたのだろうか？

もしかすると、この歩が、いる建物の中に、桂もいるかも知れない。

くすつと笑う。

タツ、とベッドから降りて、部屋の反対側の壁にあるドアへ向かう。

ブチ切れ男の棲み家だと決まった訳ではないけれど、ここが知らな

そう、歩が思っ、ドアのノブに手をかけて、下ろそうとしたま

るお おお おお おお おお おお おお おお
ー ん!!!!

30

「なっ……!?!」

ドアノブから手を離して、窓へ走り寄る。

そうして、鳴き声の主を探そうと窓の下に目を凝らして、いきなり何かが月光を遮った。

訝しく思っ顔を上げる。ギョツとした。

何か、大きな鳥のようなモノが、羽ばたきながら物凄い勢いで向かってくる。窓を大きく開けて隠れもせず、無防備に体を晒している歩の方へ、一直線に。

咄嗟にベッドから転がり落ちる。

ぐわっしやああああん!!

間髪入れずに窓が吹き飛ばされた。

キラキラとガラスの破片が舞い散って、季節外れのダイヤモンドダストを思わせる。

みしり。と床が音をたてる。

窓をぶち破った鳥のような獣はベッドを飛び越え、ガラスの破片を撒き散らしながら、部屋の反対側に着地していた。

みしり。再び床が悲鳴をあげる。美しい闖入者は堂々と足を踏みしめ、立ち上がった。

ほ……と息が漏れる。

月の光を浴びて銀に輝く獣は、途方も無く美しかった。

狼のような力強い体躯。そして未だ大きく広げられたままの、翼。

一切の無駄と不足の無い、完成された生き物。

みしり。獣が一步踏み出す。

みしり。もう一步。

爛^{らん}と光る緑の目が、歩をひたと見据える。

(……う、わ)

体が動いてくれない。

歩は何もできないまま、床を軋ませて近づいてくる獣を、ただ呆と見つめる。

みしり、みしり。

しなやかな足が、歩の目の前に置かれた。

大型の肉食動物を思わせる鋭い爪を見つけて、歩は思わず後退る。

背中がベッドの木枠にぶつかって、コンと非情な音をたてた。

逃げ場は無い。

歩は獣を見上げる。獣は歩を見下ろす。

時間だけが過ぎていく。

ふいに。ぐる、と鳴いて、獣が鼻面を近付けてきた。

(うっ……)

ガチガチに固まる歩を余所に、獣はふんふんと歩の匂いを嗅いでいる。

(こっ……これはアレだ食物の匂いを嗅いで食べ頃を調べるという野生動物の習慣か!)

ちなみにそんな習慣は野生動物は持っていない。彼らのモットーは簡単、「食えるときに食う」。実にシンプルだ。

必死に息を潜めて目をつぶり、何とかやり過ごそうと頑張る歩を見て、獣はようやく(歩の視点からすると)食品検査を止めてくれた。ふう、と息を吐いて目を開けると。

本日二度目の「ギョッ」な光景が待っていた。

獣は何を思ったか、歩の肩に鼻先を乗つけて眠っていた。安心しきった子供がするように、蹲って、幸せそうに目を閉じて。

(えっと……)

動いたら食われる！ 訳ではないと思うが、それでもここで動いたら確実に獣の機嫌は悪くなるだろう。この人生の最期の光景が視界いっぱいに開かれた動物の口、なんてできうる限り避けたいものだ。それに、第一ガラスの破片がそこら中に散らばっているから、危なくって下手に身動きも取れやしない。

(どうしよう……?)

と、途方に暮れる歩の耳が、扉の外を走る足音を捉えた。かなり慌しく駆けて来る足音は、歩の部屋の前で止まる。ガチャツ、と音がして、ドアが開かれた。

（桂……？）

ドアから現れたのは、桂に似て細い、けれど明らかに桂とは違う、青年だった。

青年は部屋の惨状と、歩と獣の様子を見て、一瞬足を止めた。そして歩に、

「動かないで下さい！」

と声をかけるや否や走り寄ってきて、獣の、

「あっ」

驚いたことに、青年は獣の口先を手で押さえて、ぐいっと歩から離した。

ぐるる、と獣が目覚まして小さく唸る。しかし青年が頭を撫でると、すぐに大人しくなってしまった。

歩はポカンとしたまま、この不思議な青年を見る。

青年は歩の視線に気付くと、穏やかににこっと笑った。

「よく寝ていらっしやいましたね、ナギさん」

「はあ」

うまく言葉が返せない。

ここは何処だとか、この獣は何なのかとか、貴方は誰だとか、何故歩の名前を知っているのかとか、それでも苗字で呼ぶのは何故だとか色々と言いたいことは山のようにあるが、とりあえず歩の口から出たのはこんな文。

「えっと……桂はどこですか」

そのセリフに青年は一瞬キョトンとした顔を見ると、ああ、と頷いた。

「ケイさんなら……」

青年が言いかけたその時、ガッチャン！

と凄まじい音をたてて、部屋のドアが開いた。

「おいアレフ！ さっきからこの部屋喧しい……………あれ、歩じゃ
ん。起きたんだおはよう」

桂が顔を出した。

足音が三人分、壁に反響している。

歩と桂は青年に案内され、ひよろ長い廊下を歩いていた。

青年はゆったりとした足取りで、どこかへ向かっている。

数メートルほど後ろに続く二人はと言えば、

「どこ行くの、これ」

「さあ？」

こそそそと気の抜けた会話を交わしていた。

「っていうかあの人誰なの、知り合い？」

「んー、知り合って一日」

「一日で名前呼び捨て!？」

「文句言われないし。良いんじゃない？」

「へ、へえー……」

青年の名前はアレフと言うのだ、と桂に教えてもらった。恐らくは十くらいも年上であろう人を躊躇無く呼び捨てにできる度胸は、歩には備わっていない。

前を進んでいた青年、改めアレフが、立ち止まって振り返る。

「そう言えば、自己紹介がまだでした。僕は、アレフ・ラウハンと言います。初めまして、ナギさん」

「あ、えと、風谷、歩です。初めまして」

と言った歩の言葉を聞いて、アレフは怪訝そうな顔をして首を傾げた。

「アユムさん、と仰るのですか？ 僕はてっきり、ナギさんというお名前なのかとばかり」

「いえ、私の名前は歩ですけど……」

そうなんですか？ とアレフはモゴモゴと呟きながら、何故か桂の方をちらっと見る。

ははあ、さては。

歩はにっこり笑顔を作って、隣にいる黒髪バカの方へ向けた。

「桂？」

「なんざんしょ」

「この人に何を吹き込んだのか吐きなさいというか吐け今すぐに」

「えーっと……」

桂は「いち、にい……」と指を折ると、ペカー、という文字が背後に浮かんできそうな笑顔を浮かべた。

「余りにも多すぎて何を言ったのか忘れてしまったよすまないナギ痛あっっ!？」

「だから何それ」

とりあえず桂の顎に下から強烈なデコピン（アゴピン？）をお見舞いする。

「……って……歩って結構凶暴だよなってあああああストツプ!! その指ストップ絶対痛いからそれ!!!!」

「なんでこのバカはこうも馬鹿なことばかりするんでしょうねえ……」
「ああバカだからか」

「待って待って歩サンその暗い笑顔怖い! 怖いよ!!」

うあああああ、と引きつる桂の耳をぎゅううううーと引っ張ってやろうと手を伸ばして、

（……ちよっと待って）

歩ははたと動きを止めた。

（よく考えると、ううん、よく考えなくても、こんなことしてる場合じゃないんじゃない?）

いきなり窓ガラスぶち破って羽生やした狼（※馬並みサイズ）が突っ込んできたりそれを同じくいきなり突入してきたアレフが宥めちゃったりそうこうしている内にひょっこり桂が現れたり、していたせいですっかり忘れていた。

ここ、どこやねんで。

ついエセ関西弁が口から出てしまうくらい深刻な事態なのを忘れちゃっていた。風谷歩、世紀の大失態である。もう正直呼び名とかナギだろうがネギだろうがどうでもいい感じである。

前を見ると、先程からの二人をにこにこと見守っているアレフの姿がある。アレフは、桂から何か聞いているんだろうか。

突然動かなくなった歩を、ん？ と不思議そうに見ている桂の袖をくいくい、引っ張って、耳貸せ、と合図する。

少し桂に屈んでもらって（何ともシヤクなことに、桂と歩の身長差はかなりある）、

「ここ、何処？」

囁く。

暫く桂は考えていたが、

「……あー」

……何、その面倒臭そうな声。

「歩には説明してなかったなあ……そーだったそーだった。忘れてた。ソーリー」

全く謝罪の意思が見られないがソレはソレとして後できつーく叱るとして。

「……どういうこと？」

「えっと、まあ、その、アレだ。ベタな言い方すれば」

きつとその瞬間の歩の表情は、さぞ滑稽などこぞのモニュメントみたいになっていたに違いない。

「異世界来ちゃいました、ってやつ？」

「……はあ？」

1-5 (後書き)

ご意見・ご感想などありましたら、何でもビシバシ言っていただけると作者のテンションとやる気がぐんぐんアップします（※決して作者はMではありません）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4397v/>

扉の向こう

2011年11月14日11時10分発行